

「時間の社会学」に基づく元号の再検討

——時代区分論を参照して——

東洋大学 鈴木洋仁

【1. 目的】

本報告は、「時間の社会学」の観点に基づき、元号の社会的位置づけを検討するものである。報告者は、これまで、元号について、主として「戦後」という時代区分との対応関係において歴史社会学の方法に基づいて検討してきた（鈴木 2017 など）。先ごろ、「平成」という元号から「令和」への改元がなされた。

「改元ブーム」ともいうべき、改元をめぐる「盛り上がり」は、日本語圏だけではなく、それを報じる日本語圏以外のメディアからの注目も集め、報告者は、そうした観点から取材等に対応した。

こうした昨今の状況にも鑑み、元号の持つ社会的位置づけについて、あらためて考察したい。

【2. 方法】

その際、参照するのは、主としてこれまで歴史学において論じられてきた時代区分論である。歴史学では、時代区分論についてこれまでさまざまな検討がなされてきた（保城 2018 など）。その際、近年では、因果分析との関係を主軸として、方法論をめぐる議論が展開されてきた（佐藤 2019）。こうした議論を踏まえた上で、本報告では、「時間の社会学」の観点から時代区分論を参照した場合に、元号をどのように捉えられるのか、という理論的な検討を行う。

【3. 結果】

本テーマセッションの趣旨にある通り、これまで社会学においては、さまざまな形で「時間の社会学」に関する理論的、経験的探求がなされてきた。また同時に、歴史学においては時代区分論が、政治学をはじめとする社会科学諸分野においては因果分析における時間という変数に注目されてきた。

時間という変数、とりわけ、「時間の社会学」を通してなされる考察は、社会学にとどまるものではなく、逆に、歴史学をはじめとした他領域への架け橋となる可能性を持っている。

しかしながら、時代区分論をめぐる議論に象徴されるように、現在まで、そうした「越境」は盛んになされているとは必ずしも言えない。

特に、本報告で言えば、元号については、歴史学者はその歴史について論じ、政治学者はその政治について論じる中で、社会学の観点からの考察や議論との交流は、積極的になされているとは言えない。

【4. 結果】

以上の考察から、本報告では、そうした他領域との「壁」が、「時間の社会学」に特有なものというよりも、社会科学的方法的理解をめぐる認識の差や、現在の社会学の位置づけをめぐるさまざまな認識論的展開に基づいているものと思料する。

元号が、日本語圏の社会においていかなる位置づけにあり、また、それが、「時間の社会学」という観点から時代区分論を参照した場合に、どのような議論が可能なのか、そういった論点についての示唆を得られるものと思料する。